



札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	看護学生の在宅看護実習に対する訪問看護ステーション指導者の受けとめ-フォーカス・グループ・インタビューの手法を用いて-
Author(s)	加藤, 欣子; 平野, 憲子; 和泉, 比佐子; 工藤, 康子; 野地, 有子
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要,第 5 号: 65-77
Issue Date	2002 年
DOI	10.15114/bshs.5.65
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6551
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n13449192565.pdf

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

看護学生の在宅看護実習に対する訪問看護ステーション指導者の受けとめ

—フォーカス・グループ・インタビューの手法を用いて—

加藤 欣子, 平野 憲子, 和泉比佐子, 工藤 康子, 野地 有子

札幌医科大学保健医療学部看護学科

要 旨

訪問看護ステーションの指導者が、基礎教育課程の在宅看護実習をどう受けとめ、学生に何を学んで欲しいと思っているかを明らかにする為に、訪問看護ステーションの実習を担当している看護職員にフォーカス・グループ・インタビューを実施した。訪問看護ステーションが実習を引き受ける意義は、学生が在宅看護や継続看護を学ぶ機会であり、ステーション側にとっては訪問看護職員の自己啓発の機会、多くの看護職に在宅看護の重要性を広める機会と受けとめていた。また、在宅看護の教育者としてより良い学びをさせたいという責任を感じる反面、十分な指導体制が整備されていないための負担も感じていた。学生に学んで欲しいことは、療養者のその人らしい生活を実感するなどの対象理解と、対象を尊重した看護ケアのあり方、継続看護の重要性、そして広く看護に興味や関心をもつことであった。

<牽引用語>在宅看護実習、訪問看護ステーション、継続看護、フォーカス・グループ・インタビュー

はじめに

保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則改正により、平成9年度から看護婦教育課程に「在宅看護論」が実習を含めて導入されることとなった。本学ではそれまで在宅看護実習を地域看護学実習の中で公衆衛生看護実習と統合し実施していた。しかし、平成9年度入学生からは地域看護学実習を、在宅看護を中心とする地域看護学実習Ⅰと公衆衛生看護を中心とする地域看護学実習Ⅱで構成することとし、前半に在宅看護実習を行い後半に公衆衛生看護実習を位置付けた。さらに、在宅看護と公衆衛生看護の統合化は重要なので¹⁾、実習が終了した時点で地域看護学セミナーを実施し、在宅看護と公衆衛生看護を地域看護として統合化している。在宅看護実習期間は1週間であり、そのうち3日間を訪問看護ステーションに依頼し、2日間は学内学習としている。

訪問看護ステーションは、看護基礎教育課程の学生や有資格看護婦の在宅看護実習の場として重視されている。従って、本学以外の看護学生や有資格看護婦の実習が競合しがちである。その上、訪問看護ステーションは経営規模が小さいところが多く^{2) 3)}、指導に当たる看護

職員の負担は大きい。しかし、訪問看護ステーションは在宅看護実習機関として要の位置にあるため、本学としては引き続き実習施設として依頼する考えである。そのためには実習を依頼する教育機関として、訪問看護ステーション職員との協働が不可欠であり、訪問看護ステーションの職員が看護基礎教育課程の在宅看護実習をどのように受けとめているか、その内発的な動機は何かを知ることが重要と考えた。

在宅看護実習や訪問看護ステーションにおける実習に関するこれまでの研究では、実習体制や内容に関するものは多いが、実習指導者の看護基礎教育課程の実習に関する受けとめの認識を明らかにしたものは少ない。僅かに、秋元園子ら⁴⁾の訪問看護実践者を対象とする研究の中で、看護基礎教育における訪問看護教育に関して、「(訪問看護には)幅広い知識と、人を尊重する心、思いやりの心、患者・家族と信頼関係を築くことが大切」などの人間性を高める教育を期待しているという認識、また、施設内看護以上に技術の応用や、コミュニケーション技術が必要であり、「病院とは異なる環境の中で生活している人の日常生活の援助を実践できるようになるためには、実習は切り離すことはできない」という認識が

記述されていた。また、水谷聖子ら⁵⁾の訪問看護ステーションを対象とした実態調査では、その自由記述欄に実習の受けとめに関する認識が記述されていたが、実習全体をどのように受けとめているか明かにした研究は見当たらなかった。

本研究は、①看護学生の在宅看護実習をどう受けとめているか、②在宅看護実習で学生に学んで欲しいと思っていることは何かを明らかにすることを目的とした。

方 法

1. 対象

対象は、札幌市内で本学の地域看護学概論及び在宅看護の実習を依頼している訪問看護ステーションの所長6人及び同施設の常勤の指導者6人とした。所長としての経験年数は1年から7年であり、指導者の訪問看護経験年数は2年から7年であった。対象者には、研究の目的と内容及び倫理的規定を文書及び口頭で説明し了解を得た。6ヶ所の訪問看護ステーションの概要は、設立後5年から9年の事業所で、経営主体は認定法人3ヶ所、医療法人3ヶ所であった。常勤職員数は、3人から7人であった。平成12年度の看護学生年間受け入れ校は1校から3校で、本校以外の看護学生の実習も引き受けていた。

2. データ収集方法

データ収集方法は、グループ・インタビュー法を用いた。グループ・インタビュー法は、共通の経験や特徴をもつ人々を対象に行う焦点集団面接法である⁶⁾。調査対象者の人数が限られており、且つ、一般的にはランダムな方法で対象選択を行わないため母集団から推論を導き出すことには不利であるが、あるテーマについての人々の思考や意識や思いつき等を引き出す方法としてすぐれているといわれている^{6) 7)}。

インタビュー技法は、S・ヴォーン、J・S・シューム、J・シナグブラの技法⁸⁾にのっとって行った。インタビューは所長6人のグループと指導者6人のグループを各1回、それぞれ90分行った。以降、訪問看護ステーションの所長および指導者をまとめて「訪問看護ステーションの指導者」または「指導者」と称する。会場は外部からの影響を受けない個室で行った。参加者は対象者の他に司会者1人、司会補助1人、記録者2人のスタッフが加わり計10人だった。4人のスタッフは全員共同研究者だった。司会者及び司会補助のフォーカス・グループ・インタビューの経験は初回だった。司会者は、①本学に限らず、これまでに引き受けた看護学生の在宅看護実習をどう受けとめているか②在宅の場で学生に学んで欲しいと思っていることは何かの質問を出して話し合いを促し、全員の発言を促す声かけ以外の細かな質問はしなかった。司会補助は司会者の隣席でほとんど発言せず、グループインタビ

ューの終了直前に対象者が十分に表現されてないと思われる発言内容についての確認をした。参加者の同意を得た後でテープレコーダーによる録音を行い、録音記録の不鮮明な部分を補う目的で記録者は別に記述による記録を併行して行った。

3. 分析方法

分析方法は、前述のS・ヴォーン、J・S・シューム、J・シナグブラのグループ・インタビューの技法⁸⁾及び舟島なをみの看護概念創出法⁹⁾を参考に行った。具体的には、録音テープを逐語記録に起し、逐語記録からインタビューの項目ごとに一意味、一文・句の単位を抽出しデータとした。一つ一つのデータの文脈を精読し意味や内容を損うことのない範囲で不要な用語や重複を排除して修正し初期コードとした。初期コードをコーディングして一次コードを作成し、類似したコードをまとめ二次コード、三次コードを作成した。三次コードの意味内容の類似性、相違性を検討してサブカテゴリを形成し、それらの三次コードを抽象化し命名した。更に同様の方法でカテゴリを形成し命名した。分析の妥当性は研究者間で検討した。

結 果

1. 指導者は看護学生の在宅看護実習をどう受けとめているか (表1)

訪問看護ステーションの指導者が看護学生の在宅看護実習をどのように受けとめているかに関するデータは57単位抽出された。表1はそのデータの初期コード、及び一次・二次・三次コードの一覧である。データ分析の結果、以下の8つの三次コードにまとめられた。また、8つの三次コードから4つのサブカテゴリと3つのカテゴリが抽出された。

1) 学生が在宅看護の特性を学ぶ機会

「多くを望まないが、生活の中心は在宅であることを分る看護婦になって欲しいという思いで受けている」や「入院している病人は仮の姿、家に帰ったら本来の生活に戻ること分れば良い」の初期コードの通り、「学生が在宅看護の特性を学ぶ機会」と受けとめていた。

2) 病院から在宅への継続看護の視点や役割を学ぶ機会

「退院すると完結する看護ではなく、患者は在宅に戻るとそこから生活が始まる時の看護婦は何をするのか掴んで欲しい」や「学生が病院勤務した時に、在宅療養する人にどんな役割果たすべきか学んで欲しい」の初期コードに示されるように、「病院から在宅への継続看護の視点や役割を学ぶ機会」と受けとめていた。

3) 訪問看護者の自己啓発の機会

「実習指導するからにはきちんと勉強しなきゃと

表1 訪問看護ステーション指導者は看護学生の在宅看護実習をどう受けとめているか

NO	初期コード	一次コード	二次コード	三次コード
1	多くを望まないが、生活の中心は在宅であることを分かる看護婦になってほしいという思いで受けている	生活の中心は在宅であることを分かる看護婦になってもらう		1) 学生が在宅看護の特性を学ぶ機会
2	入院している病人は仮の姿、家に帰ったら本来の生活に戻ること分かれば良い	家庭では本来の生活に戻ること分かってもらう	在宅が本来の生活であること学ぶ機会	
3	準備のために苦労はあるが、患者本来の生活を知って欲しいと思い受けている	在宅の患者本来の生活知って欲しい		
4	在宅のその人らしい生活に戻れるようにつなげる看護がイメージできるだけでも良いと思い受けている	在宅のその人らしい生活に戻る看護をイメージできる	その人らしい生活のイメージ力を養う機会	
5	病院の生活は自由が狭められることを思い起こす機会にして欲しい	病院生活の自由度の狭さに気付いて欲しい	病院の生活は自由が制限されることを気付く機会	
6	病院の中だけの看護しかしてこなかった反省から、退院すればそれで終わりという感覚はいけないということを知って欲しい	退院すればそれで終わりという感覚持ってもらわないため	退院すればそれで終わりでない看護を学ぶ機会	
7	ターミナルや重症度の高い事例を受け持たせ、こういう人も在宅看護の対象であることを理解して欲しい	ターミナルや重症度の高い事例でも在宅看護の対象であることを理解してもらう	在宅看護の対象の範囲学ぶ機会	
8	退院すると完結する看護ではなく、患者は在宅に戻るとそこから生活が始まる時の看護婦は何をするのか悩んで欲しい	在宅の生活に戻るときの看護の役割掴んでもらう		2) 病院から在宅への継続看護の視点や役割を学ぶ機会
9	学生が病院勤務したときに、在宅療養する人にどんな役割果たすべきか学んで欲しい	在宅療養する人への看護の役割学んでもらう	在宅療養する人への看護の役割学ぶ機会	
10	患者が退院するときに社会資源にはどのようなものがあるか分かってつながりができてくれれば良い	在宅看護に必要な社会資源が分かるとつながりができる看護婦に	社会資源分かって在宅につながる看護を学ぶ機会	
11	在宅療養者とその家族もボンと帰されるより、入院は人生の一部という目で関わってもらえる看護婦になること願っている	在宅療養者とその家族も入院は一時の生活と分かる看護婦を期待している	在宅療養者とその家族も継続看護を望んでいることを知る機会	
12	実習指導するからにはきちんと勉強しなきゃという意味でプラスになる	職員の自己研修の機会になる	職員の自己研修の機会	
13	自分達の凝り固まった在宅看護に関するイメージを打ち砕いてくれることに期待	自己の在宅看護の固定観念を砕く機会	自己の看護観を振り返る機会	3) 訪問看護者の自己啓発の機会
14	実習指導は困難もあるが喜びもあるので受けていこうという姿勢である	実習指導は困難もあるが喜びもある	実習指導は喜びもある	
15	理論と実践がつけられるような知識を持って来て欲しい	学生から理論と実践がつけられるような知識を学びたい		
16	学生は患者のための様々な看護を工夫し、その発想が新鮮	学生は新鮮な発想で患者のために工夫する	学生から学ぶ機会	
17	学生が在宅看護論で学んだ知識を真摯に展開する姿勢から学ぶことが多い	学生の実験に学ぶ姿に学ぶ		
18	日頃職員が見ていなかった視点到が学生が気付く	職員の盲点を学生が気付く		
19	学生ならではの気づきが勉強になる	学生の気づきに触発		
20	病院で働いている看護者にステーションの理解者を増やす宣伝になるかなという思い	病院看護婦にステーションの理解者増やす機会		4) 多くの看護職に訪問看護の重要性を広める機会
21	看護職に訪問看護ステーションの存在を理解してもらう意味で重要と思う	ステーションの存在を知らせる機会	訪問看護ステーションの理解者増やす機会	
22	学生は利用者の視点で評価し、ステーションの評価を外でしてくれるひとつの広報活動と思っている	学生はステーションの評価を外でしてくれる		
23	継続看護の視点を多くの看護婦に持ってもらうと私達が働きやすくなる	継続看護の視点もつ看護婦の増加は訪問看護婦に有利	継続看護の視点持つ看護職の増加の機会	
24	病院の看護婦もあまり分かってもらえない部分をこういう場もあることを理解する人が増えると、いつか気付くようになることを期待	在宅看護を理解する人が増えることを期待		
25	将来のステーションの職員として来てくれる人かも知れないと思っている	将来のステーション職員として来てくれる事期待	将来の訪問看護ステーションの職員への教育	

表1 訪問看護ステーション指導者は看護学生の在宅看護実習をどう受けとめているか(続き)

NO	初期コード	一次コード	二次コード	三次コード
26	教員と相談し、試行錯誤の結果広く浅く見る実習よりも、受持ちを決めて看護展開する実習にした	試行錯誤の結果、受持ちを決めて看護展開する実習にした。		5) 学生がより良い学びをする機会の提供
27	在宅看護実習に入る前に保健所実習を終えた学生と病棟実習後にすぐ来る学生によって受け入れ方を違えている	先行実習の内容によって受け入れ方を変える	実習内容を検討しながら良い学びを追究	
28	問題があるという学生でも、場を変えると生き生きしてくる	場を変えると学生が生き生きする		
29	様々な面からの変化に富んだ在宅看護が見れるように、可能な限り沢山見せる	様々な在宅看護を可能な限り沢山見せる	様々な場面を見せてやりたい	
30	いろいろ見せてやりたい	いろいろ見せてやりたい		
31	看護とは?在宅の特徴は?と何かひとつでも良いから心を動かされる体験を大切にしたい	看護について心を動かされる体験を大切にしたい	看護に心を動かされる機会	
32	在宅で看護が好きになって欲しい	在宅で看護を好きになってもらう		
33	在宅看護はすごく面白いことを知ってもらいたい	在宅看護の面白さ分かってもらう		
34	在宅看護実習はヘンダーソンやナイチンゲール等の看護理論を実際に適応する上で最もふさわしいところ	理論と実践つなげられるところ	理論を実践につなげる機会	
35	実習施設として指導体制ができていないので学生には自分の課題を持ち、それに沿ってしてもらう	実習体制が出来ていないので学生の主体的な学びに期待	学生の主体的学びに期待	
36	訪問看護ステーション実習はカリキュラム上必要なので嫌とはいわない	実習の場となること否定はしない	訪問看護ステーションでの実習の必要性は理解	
37	訪問看護実習は是非必要という社会的ニードあること理解	訪問看護実習への社会的ニードは理解		
38	指導は教員にしてもらい、場所の提供だけと難しく考えない	場所を提供するだけでも良い	学びの場は提供したい	
39	ステーションのそのままの現実をみてもらえればありがたい	ステーションの現状見るだけでも良い	現状から学ぶこと期待	
40	指導時間不足のため学生の理解内容未確認のまま終わってしまうことが多い	指導時間不足のため学生の理解内容未確認で終わる	指導内容確認出来ない	
41	きちんと指導したいと思いながら指導をする時間なくフラストレーションたまる	十分な指導をする時間がないフラストレーション	指導者として不全感	
42	十分な指導ができない時にフラストレーションある	十分な指導ができないフラストレーション		
43	進んで来て下さいという感じはない	積極的に歓迎できない	消極的受け入れ	
44	利用者の状況に波があり、学生指導に当りあはずれがあるのは今後の課題	事例提供にむらがある	利用者の動向に左右される実習	
45	自分たちの看護記録を基にして実習することへの疑問	実習指導のための看護記録ではない	教材も未整備	7) 不十分な指導体制での指導者としての不全感
46	訪問時の学生を同乗させると事故が心配で緊張する	学生同乗の間事故が心配	精神的負担	
47	学生送迎で一回一回戻るので時間がかかる	学生送迎による交通時間の延長	学生の送迎に時間かかる	
48	学生と向き合う時間がないため評価が難しく毎年悩む	学生と向き合う時間少なく評価が難しい		
49	指導者自身が利用者を受け持っているの、学生と向き合う時間が取れず悩む	学生と向き合う時間が確保できない	指導の時間取れない	
50	時間を取るのが大変というのが現状	時間を取るのが大変		
51	教員は訪問対象者を見ずに指導を現場にまかせている	教員は利用者の実態知らずに任せて良いか		
52	評価の基準を細かく示さず現場にまかせればなしの実習は考えて欲しい	評価も現場に任せ過ぎ	任せきりの実習ではないか	
53	任せればなしの実習で果たして良いのか今後の課題	任せきりの実習で良いのか疑問		
54	2回の訪問で看護過程展開できるか疑問	2回の訪問で看護過程展開できるか疑問	学生には困難な課題が設定	
55	現任の看護婦でもできない課題を持って来ている	学生の力量以上の課題が課されている		8) 教育機関の実習体制や内容に不満
56	いろいろな学校の学生のレポートが重なり混乱する	複数の学校のレポート重なる	適切な評価出来ない	
57	評価の基準をもっと細かくしてもらわないと困る	評価基準を判りやすくして欲しい	評価基準の判りにくさ	

いう意味でプラスになる」や「自分達の凝り固まった在宅看護に関するイメージを打ち砕いてくれることに期待」の初期コードに示されるように、「訪問看護者の自己啓発の機会」と受けとめていた。

4) 多くの看護職に在宅看護の重要性を広める機会

「病院で働いている看護者にステーションの理解者を増やす宣伝になるかなという思い」や「看護職に訪問看護ステーションの存在を理解してもらう意味で重要と思う」の初期コードに示されるように、「多くの看護職に訪問看護の重要性を広める機会」と受けとめていた。

5) 学生がより良い学びをする機会の提供

「教員と相談し、試行錯誤の結果広く浅く見る実習よりも、受持ちを決めて看護展開する実習にした」や「在宅看護実習に入る前に保健所実習終えた学生と病棟実習後にすぐ来る学生によって受け入れ方を違えている」の初期コードに示されるように、「学生がより良い学びをする機会の提供」と受けとめていた。

6) 学びの場だけでも提供したい

「実習施設として指導體制ができていないので学生には自分の課題を持ち、それに沿ってみてもらう」や「訪問看護ステーション実習はカリキュラム上必要なので嫌とはいわない」の初期コードに示されるように、「学びの場だけでも提供したい」と受けとめていた。

7) 不十分な指導體制での指導者としての不全感

「指導時間不足のため学生の理解内容未確認のまま終わってしまうことが多い」や「きちんと指導したいと思いつながら指導をする時間なくフラストレーションたまる」の初期コードに示されるように、「不十分な指導體制での指導者としての不全感」と受けとめていた。

8) 教育機関の実習体制や内容に不満

「教員は訪問対象者を見ずに指導を現場にまかしている」や「評価の基準を細かく示さず現場にまかされればなしの実習は考えて欲しい」の初期コードに示されるように「教育機関の実習体制や内容に不

満」と受けとめていた。

9) 在宅看護実習をどう受けとめているかのサブカテゴリ化及びカテゴリ化 (表2)

在宅看護実習をどう受けとめているかに関する8つの三次コードの類似性・相違性を検討しサブカテゴリを形成した。「学生が在宅看護の特性を学ぶ機会」と「病院から在宅への継続看護の視点や役割を学ぶ機会」は「学生が在宅看護を学ぶ機会」とサブカテゴリ化した。「訪問看護者の自己啓発の機会」と「多くの看護職に訪問看護の重要性を広める機会」は「指導者にメリット」とした。「学生がより良い学びをする機会」と「学びの場だけでも提供したい」は「学生の学びに貢献したい」とした。「不十分な指導體制での指導者としての不全感」と「教育機関の実習体制や内容に不満」は「実習指導體制に不満」とした。4つのサブカテゴリの意味内容の類似性、相違性を検討しカテゴリを形成した。「学生が在宅看護を学ぶ機会」と「指導者にメリット」は「在宅看護実習を引き受けることは必要」とカテゴリ化した。「学生の学びに貢献したい」は抽象化して「在宅看護教育への使命」とし、「実習指導體制の不满」のサブカテゴリは抽象化して「実習は負担」とした。

2. 指導者が在宅の場で学生に学んで欲しいと思っていること (表3)

訪問看護ステーションの指導者が学生に学んで欲しいと思っていることに関するデータは、53単位抽出することができた。表2はそのデータの初期コード、および一次・二次・三次コードの一覧である。データ分析の結果、8つの三次コードにまとめられた。また、8つの三次コードから4つのサブカテゴリと2つのカテゴリが抽出された。

1) 対象のその人らしい生活を実感する

「本来の病人の生活を知って欲しい」や「高齢者は一人一人違うのでこういう感じというイメージで入られるとちょっと違うかな」の初期コードに示されるように、「対象のその人らしい生活を実感する」ことをあげていた。

表2 在宅看護実習をどう受けとめているかのサブカテゴリ及びカテゴリ

三次コード	サブカテゴリ	カテゴリ
1) 学生が在宅看護の特性を学ぶ機会	学生が在宅看護を学ぶ機会	在宅看護実習を引き受けることは必要
2) 病院から在宅への継続看護の視点や役割を学ぶ機会		
3) 訪問看護者の自己啓発の機会		
4) 多くの看護職に訪問看護の重要性を広める機会	指導者にメリット	
5) 学生がより良い学びをする機会の提供	学生の学びに貢献したい	在宅看護教育への使命
6) 学びの場だけでも提供したい		
7) 不十分な指導體制での指導者としての不全感	実習指導體制に不満	実習は負担
8) 教育機関の実習体制や内容に不満		

表3 指導者が在宅看護実習で学生に学んで欲しいと思っていること

NO	初期コード	一次コード	二次コード	三次コード
1	本来の病人の生活を知って欲しい	在宅で生活している病人本来の姿	病気を持った生活者の理解	1) 対象のその人らしい生活を実感すること
2	高齢者は一人一人違うのでこういう感じというイメージで入られるとちょっと違うかな	一人一人の高齢者像は異なる	対象者の個別性の重視	
3	パターンでなく個性ある部分を大切にしていこうと心がけて伝える	対象者の個性を大切に		
4	看護の視点の前に人間として対象を知り、触れ合う姿勢が大事	看護者の固定観念を避け人間として対峙することが優先	人間として対峙すること	
5	地域のサービスや近所の人に囲まれて生活している療養者をストレートに感じて欲しい	様々な資源に囲まれて生活している療養者の実感	様々な資源を利用している療養者の実感	2) 周囲の人々や資源に囲まれ生活している対象の理解
6	困っているからサービスをいれるというのではなく、地域はもともとフォーマル、インフォーマルなサービス関係の中にあることを捉える目を持って欲しい	地域はもともと多様なサービス関係があること見て欲しい	地域の人々は様々なサービス関係の中にある	
7	家族や近隣、周りの支援に支えられて生活している対象者を見て欲しい	家族や近隣、周囲に支えられて生活している対象者	周囲に支えられた生活者の姿	
8	表面的な理解でなく、対象のこれまでの生活歴を踏まえて今の生活あるところを分かってもらいたい	長い生活歴を経て築かれた普段の生活を想像する努力	生活歴を踏まえて日常生活を捉えること	
9	対象者の生きてきた過程に気付いてあげる	対象の生きてきた軌跡に気付く	対象者の秘めている何かを感じること	3) 対象を表面的に捉えず柔軟で奥深い理解をする
10	利用者さんの表面だけを見ないでもっと奥深く秘めているものに気付いてあげられる見方をして欲しい	利用者さんの表面だけを見ない奥深く持っている何かに気付くことができる見方		
11	何でも訴えられない人の気持ちを気付いて引き出せるような見方をしていきたい	訴えられない人の気持ちを引き出せるような見方		
12	自分の考えの中でパターン化せずいろいろな方面から対象を理解する気持ちが大事	看護職の固定観念で見ず、人間として柔軟に接して理解する		
13	体験する中で何でも良いからひとつ心を動かされる印象に残るものをもって欲しい	心を動かされる印象に残るものを大切にする	人間としての柔軟な感性による対象理解	4) 在宅における対象尊重の看護
14	1時間の訪問時間だけでなくそれ以外の時間の生活にまで想像が及んで欲しい	訪問時間以外の24時間の生活理解	24時間の生活理解	
15	対象者の大事にしていることを受けとめて欲しい	対象が大事にしていることを受け止める	対象者の価値観の尊重	
16	医療関係者の価値観を押し付けるのではなく、本人の生活や価値観を医療・看護ケア面でどれだけ尊重しているかを見て欲しい	本人の価値観を尊重した看護の姿を学んで欲しい		
17	自分にとって興味がなくとも、対象者が大事にしている思い出話に十分関心を向けて聴く姿勢を学んで欲しい	対象者の語りに耳を傾けることの重要性	自己の価値観の相対化	
18	在宅生活の中でその人の大事にしている生活にどんな風に援助をしているかを見てほしい	対象者の大事にしている生活を尊重した援助の実際		
19	学生の価値観では考えられないような生活がある	自分の価値観を相対化する		
20	その人はその人であって決して自分の価値観で対象者を見てはいけない	自分の価値観で対象を見ない		
21	主体は利用者なので、その人がうまく生活できるように手伝える存在を見て欲しい	利用者がうまく生活できる看護	対象者の生活に合わせた看護の姿勢	
22	利用者を尊重するためにその人の暮らしぶり、ペース、必要なこと、望むことややれることをどうすり合わせるか見て欲しい	対象者の望む生活に近づける看護		
23	身体を洗うのに洗剤の容器や割り箸を使うところに感動している	対象者の生活実態に合わせた看護に感動		
24	利用者に対する誠実さをもち続ける視点に重きを置く	利用者に対する誠実さの維持		
25	家族全体が同意できるまで待つ看護のあることを見て欲しい	家族全体が同意できるまで待つ看護の重要性	対象者に対する誠実さ	待つ看護の存在

表3 指導者が在宅看護実習で学生に学んで欲しいと思っていること(続き)

NO	初期コード	一次コード	二次コード	三次コード	
26	生活している療養者・家族の生活に合わせて看護者は動く	生活者に合わせた看護	対象者の状態に合わせた看護	5) 対象との関係性を重視した看護	
27	その日その日の対象者の顔色や機嫌や反応を見て看護の内容を判断し対応しているところを見て欲しい	日々の対象者の状態に合わせた看護			
28	看護する自分の存在が与える影響を理解し、うまく関係を結ぶことを学んで欲しい	看護者の対象者への影響を感じて欲しい	対象との関係構築の重要性の理解		
29	利用者さんにエネルギーを与えている看護を見出して欲しい	対象からもエネルギーを与えられるような看護	対象者との相互作用の大切さの理解		
30	対象の生きてきた過程に気付いてあげてそこからともにいる姿勢でかかわることの重要性を感じて欲しい	寄り添う看護の姿勢	寄り添う看護		
31	重症度の高い人を受け持ってもらって、こういう人でも在宅看護ができるんだと分かってもらう	重症でも可能な在宅療養	医療依存度高くとも支えられる在宅看護	6) 在宅看護ケアの多様性と高度な技術性	
32	医療依存度の高い人でも在宅療養が可能であること	医療依存度高くとも可能な在宅看護			
33	いろんな医療処置がある人も在宅療養できること	医療処置が多くとも可能な在宅看護			
34	ただ、お話を聴くだけの看護の大切さは分かりづらいつい分かって欲しい	在宅における精神看護			在宅における精神看護の必要性
35	いろいろな説明しなければならぬ家族を見て欲しい	家族への保健指導の必要性			家族が看護の対象
36	家族の健康管理も在宅看護の役割であること	家族の健康管理の必要性	在宅看護におけるケア内容の幅広さ	7) 病院から在宅への継続看護の視点と役割	
37	こんなことまでと思われるような看護もする必要ある	幅広い看護の内容が求められる			
38	ヘンダーソンやナイチンゲールの理論を実践と結びつけることが容易な場が在宅看護である	看護理論と実践を結合させ科学的な看護を学べる場所			理論と実践の結合
39	どうするとその人らしい生活に戻れるのかイメージもてるようになって欲しい	その人らしい生活に戻れるイメージ力	その人らしい生活のイメージ持てる	院内看護と在宅看護の違いの理解	
40	病院の看護で、家に戻ったらどうなるのかなという思いが一寸でもよぎるようになれば成果	患者の退院後の生活をイメージできる			
41	病院では当然やることでも、在宅ではやらない違いを分かって欲しい	病院における看護と在宅看護の違い			
42	あまり多くのものは望まないが、生活の中心は在宅であることを理解して、病院看護に生かして欲しい	生活の中心は在宅であることへの理解			
43	入院中はその人の仮の姿、退院後が本来の姿であることを理解し、病院看護の役割考えて欲しい	退院後は本来の姿に戻ることとをケアすることが役割			
44	退院するときの社会資源にどんなものがあるか、こういうものでつないでいこうとつながられる看護ができれば良い	在宅看護へつなげられる看護	在宅看護の学びを病院看護に生かして欲しい		
45	継続看護の視点をたくさんの方にもってもらうと在宅看護助かる	多くの看護婦が継続看護の視点を持つ			
46	入院というのは人生の中の一部という目で病棟看護婦さんは関わってほしい	在宅へつなぐことが出来る基礎的能力			
47	卒後病院勤務した時、在宅にどのようにつないで行く役割あるか学んで欲しい	卒業後、病院生活から在宅療養へのつながりが出来る看護者になって欲しい			
48	その人が在宅に戻ったときにどんな社会資源があるのか思いを馳せて欲しい	社会資源を活用して在宅生活送れるかを考えられる			
49	病院の看護婦に訪問看護ステーションの内容を知って欲しい	訪問看護ステーションの内容知って欲しい	訪問看護ステーションの役割知って欲しい	8) 看護に関心や興味を持つこと	
50	現場の看護婦も訪問看護ステーションの内容分っていないので学生に来てもらうと宣伝になるかな	訪問看護ステーションの内容を宣伝したい			
51	広くは看護を好きになってもらって	看護を好きになって欲しい	看護を好きになる		
52	在宅で看護を好きになって欲しい	在宅看護も好きになって欲しい			
53	在宅看護の面白さを感じて欲しい	在宅看護の面白さを感じて欲しい	在宅看護の面白さ		

2) 周囲の人々や資源に囲まれ生活している対象の理解

「地域のサービスや近所の人に囲まれて生活している療養者をストレートに感じて欲しい」や「困っているからサービスをいれるというのではなく、地域はもともとフォーマル、インフォーマルなサービス関係の中にあることを捉える目を持って欲しい」の初期コードに示されるように、「周囲の人々や資源に囲まれ生活している対象の理解」をあげていた。

3) 対象を表面的に捉えず柔軟で奥深い理解をする

「表面的な理解でなく、対象のこれまでの生活歴を踏まえて今の生活があるところを分ってもらいたい」や「1時間の訪問時間だけでなくそれ以外の時間の生活にまで想像が及んで欲しい」の初期コードに示されるように「対象を表面的に捉えず柔軟で奥深い理解をする」ことをあげていた。

4) 在宅における対象尊重の看護

「対象者の大事にしていることを受けとめて欲しい」や「医療関係者の価値観を押し付けるのではなく、本人の生活や価値観を医療・看護ケア面でどれだけ尊重しているかを見て欲しい」の初期コードに示されるよう「在宅における対象尊重の看護」をあげていた。

5) 対象との関係性を重視した看護

「生活している療養者・家族の生活に合わせて看護者は動く」や「看護する自分の存在が与える影響を理解し、うまく関係を結ぶことを学んで欲しい」の初期コードに示されるように「対象との関係性を重視した看護」をあげていた。

6) 在宅看護ケアの多様性と高度な技術性

「重症度の高い人を受け持ってもらって、こういう人でも在宅看護ができるんだと分かってもらう」や「医療依存度の高い人でも在宅療養が可能であること」の初期コードに示されるように「在宅看護ケアの多様性と高度な技術性」をあげていた。

7) 病院から在宅への継続看護の視点と役割

「どうするとその人らしい生活に戻れるのかイメージもてるようになって欲しい」や「病院では当然

やることでも、在宅ではやらない違いを分かって欲しい」の初期コードに示されるように、「病院から在宅への継続看護の視点と役割」をあげていた。

8) 看護に関心や興味を持つこと

「広くは看護を好きになってもらって」や「在宅で看護を好きになってほしい」の初期コードに示されるように、「看護に関心や興味を持つこと」をあげていた。

9) 学生に学んで欲しいと思っていることのサブカテゴリ化及びカテゴリ化 (表4)

在宅看護実習で学生に学んで欲しいと思っていることは何かについての8つの三次コードの意味内容の類似性・相違性を検討しサブカテゴリを形成した。「対象のその人らしい生活を実感すること」「周囲の人々や資源に囲まれ生活している対象の理解」「対象を表面的に捉えず柔軟で奥深い理解をする」は「在宅看護の対象理解」とサブカテゴリ化した。

「在宅における対象尊重の看護」と「対象との関係性を重視した看護」、「在宅看護ケアの多様性と高度な技術性」は「在宅看護ケアの特性」とした。「病院から在宅への継続看護の視点と役割」は「継続看護の重要性」とした。「看護に関心や興味を持つこと」は、「看護への関心・興味」とした。

「在宅看護の対象理解」、「在宅看護ケアの特性」、「継続看護の重要性」、「看護への関心・興味」のサブカテゴリの意味内容の類似性・相違性を検討しカテゴリを形成した。「在宅看護の対象理解」と「在宅看護ケアの特性」、「継続看護の重要性」の3つのサブカテゴリは「在宅看護の特性」とカテゴリ化した。「看護への関心・興味」は「看護の魅力」とした。

考 察

1. 指導者は看護学生の在宅看護実習をどのように受けとめているかについて表2のカテゴリの通り、「在宅看護実習を引き受けることは必要」と「実習は負担」の3つの視点から捉えられていると考えられた。

- 1) 在宅看護実習を引き受けることは必要

表4 学生に学んで欲しいと思っていることのサブカテゴリ及びカテゴリ

三次コード	サブカテゴリ	カテゴリ
1) 対象のその人らしい生活を実感すること	在宅看護の対象理解	在宅看護の特性
2) 周囲の人々や資源に囲まれ生活している対象の理解		
3) 対象を表面的に捉えず柔軟で奥深い理解をする		
4) 在宅における対象尊重の看護	在宅看護ケアの特性	
5) 対象との関係性を重視した看護		
6) 在宅看護ケアの多様性と高度な技術性		
7) 病院から在宅への継続看護の視点と役割	継続看護の重要性	
8) 看護に関心や興味を持つこと	看護への関心・興味	看護の魅力

指導者は、在宅看護実習を引き受ける必要を二つの視点から捉えていた。第一は、「学生が在宅看護を学ぶ機会」であり、第二は「指導者にメリット」であった。

第一の学生が在宅看護を学ぶ機会の最初の「在宅看護の特性を学ぶ機会」で強調されているのは、「生活の中心は在宅」、「入院している病人は仮の姿」、「在宅のその人らしい生活」と表現されているように、居宅で看護することが療養者を生活者たらしめるという視点であった。これは、ナイチンゲールの在宅看護の考え方の一つである「在宅看護であればこそ得られるものに、生きがいにも通じる励ましがある。家庭であれば病人がより元気をつくような環境を確保でき、病人は生活の日常性を保持し、主体性を自覚できる」¹⁰⁾と捉えた視点と同一で、家庭こそ、療養者が生命力や生活的力量を発揮でき、それを支える看護が出来るというものである。

ついで「病院から在宅への継続看護の視点や役割を学ぶ機会」も、在宅看護論の主要な学習課題の一つである¹¹⁻¹³⁾。今回の指導者達の継続看護はもっぱら病院から在宅への方向であり、病院の看護職に継続看護の視点をもっと重視してもらいたい、そのために将来病院で働くであろう学生が継続看護を学ぶ機会は重要と受けとめていた。

実習を引き受ける必要の第二は「指導者にメリット」と受けとめていた。これは在宅看護実習を引き受ける二次的効果といえる。とりわけ「訪問看護者の自己啓発の機会」という受けとめに関しては、平成12年の訪問看護・家庭訪問サービス定点モニター調査結果¹³⁾の中で、最も多い問題点が「訪問看護婦の質向上・教育難しい」をあげているように、多くの訪問看護ステーションにおける悩みといわれている。また、訪問看護ステーションの職員自身、学生の臨地実習を受けることは職員の資質の向上につながり、後輩看護婦の育成に協力できるので、学生実習の受け入れは意味がある^{14) 15)}と述べている。さらに全国訪問看護事業協会の「訪問看護ステーション臨地実習マニュアル」¹⁶⁾でも、実習は訪問看護者の自己啓発の機会になる事が詳細に記述されている。

「多くの看護職に在宅看護の重要性を広める機会」は、「学生が在宅看護を学ぶ機会」と表裏の関係にあり、学生が在宅看護の特性や継続看護の視点や役割を学ぶことが、多くの看護職に在宅看護の重要性を広めることになるかと期待していた。1998年の厚生労働省「衛生行政業務報告」¹⁷⁾では、訪問看護ステーションの在籍者数は、病院・診療所に勤務する看護婦・士の僅か1.5%である。指導者達は、その圧倒的な数の病院・診療所で看護を担っている看護職が在宅看護への関心を高めるためには、実習で学んだ

学生が病院や診療所の看護婦・士となって進出し、その割合が増加することによって実現できると期待していた。

2) 在宅看護教育への使命

指導者達は、充分とは言えない実習体制の中で、教員と協議を重ね実習内容の吟味をしながら可能な限りより良い学びが出来るよう努力していた。また条件のないところでは、せめて実習の場だけでも提供して在宅看護教育に貢献しようとしていた。

3) 実習は負担

一方、指導者は実習を負担と捉えていた。その一つは、訪問看護ステーションに関わる問題であり、今一つは、実習を依頼されている教育機関に関わるものであった。訪問看護ステーションは、在宅療養者と契約を結んで看護ケアを提供する事業所としての機能は有していても、今後ますます増加するであろう在宅ケアの需要を担う在宅看護職員を再生産する為の教育機能、即ち、訪問看護ステーション内に、教育者、実習生のための学習スペースや備品などが制度的に備えられていない。現在の在宅看護実習は、専ら訪問看護ステーションの看護職や利用者の自発的な協力によって成り立っている。その為に様々な負担が職員や利用者に及んでいるといえる。学生を訪問看護ステーションの車に同乗させて移動する時の事故の問題、指導の時間が充分確保できず納得のいく指導ができない悩み等は、実習を引き受けている訪問看護ステーションの共通の悩みとなっている⁵⁾。

また、教育機関に関わる問題の内容は、必ずしも本校の実習体制に該当しないものもあった。「(訪問看護ステーションに)任せきりの実習ではないか」の認識に関しては、訪問看護ステーションという事業所の特性から改善が困難な問題といえる。訪問看護ステーションの看護サービスは、利用者と一定の料金で契約をして提供しているものである。実習の目的で第三者である教員が訪問看護ステーションの職員の代行をすることは不可能である。訪問看護ステーションが、在宅看護職員再生産の場としても位置付けられ、看護職員の教育の為の訪問看護が別枠で設定されるようになれば検討できる内容である。

4) 三つのカテゴリーの関連 (図1)

表2の三つのカテゴリーの関連性を検討した結果、図1のように構造化することが出来た。即ち「在宅看護教育への使命」のカテゴリーを軸にして「在宅看護実習を引き受けることは必要」と「実習は負担」がバランスを保っていると考えられた。「実習は負担」が小さくなると「在宅看護教育への使命」は左に移動して「在宅看護は必要」を強く支え「在宅看護教育への使命」は強くなる(図2)。逆に「実習は負担」が大きくなると「在宅看護教育

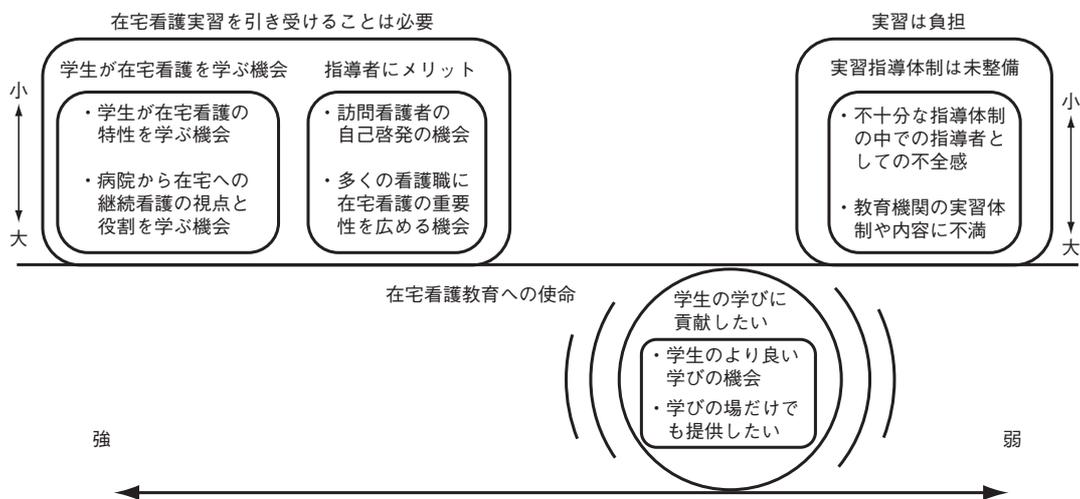


図1 指導者の在宅看護実習の受けとめ

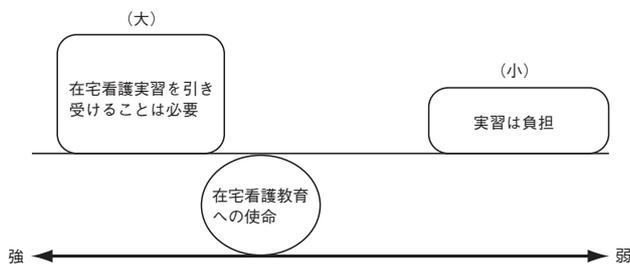


図2 在宅看護教育への使命強くなる

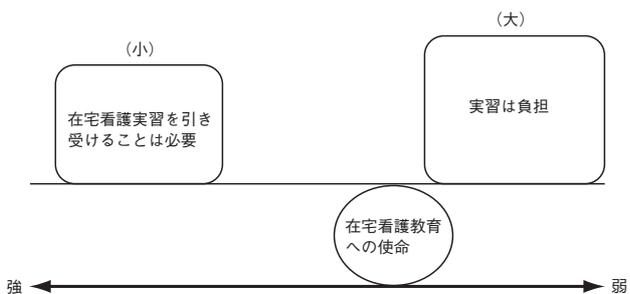


図3 在宅看護教育への使命弱くなる

への使命」は右に移動して「実習は負担」を多く支えなければならず「在宅看護教育への使命」は弱くなるという関係である(図3)。

2. 在宅の場で学生に学んで欲しいと思っていることは何かについて指導者は、自己の施設内看護の体験や現在の訪問看護実践を通して、在宅看護の学生に多くの学びを期待していた。それは表4の通り大きくは「在宅看護の特性」であり、それを根底から支える「看護の魅力」であった。

1) 在宅看護の特性

この内容の筆頭は、対象理解であり、対象に対する曖昧な概念や生活体験の少ない学生に対して、在

宅で生活する療養者・家族の生活を「対象を表面的に捉えず柔軟で奥深い理解をする」ために「対象のその人らしい生活を実感すること」や「周囲の人々や資源に囲まれ生活している対象の理解」を学んで欲しいと考えていた。

大谷英子は、「(大学生の) 老人イメージと形成要因に関する調査研究」¹⁸⁾の中で、老人との同居経験のある学生は勿論、会話や世話の経験のある学生も少なく、そのような学生の老人のイメージはネガティブである一方、老人と会話したり、印象に残った経験をもつ学生の老人のイメージはポジティブであったという。そのことから「学習・実習の場で老人と正面から向き合うような機会を設ける配慮が大切」であると報告している。看護学生の場合は病院における実習もあることから、高齢者と接する機会はあるが、そこでの高齢者の生活は病院の規則や他の患者との共同生活という制約を受けた姿であって、家族や地域の人々に囲まれた本来の高齢者の姿ではない。訪問看護ステーションにおける実習は、病院の中での患者の姿と家庭における姿との違いを明確に理解することができ、学生が生活者を理解するうえで必須の体験なのである。

次に、指導者が学んで欲しいとしていたことは在宅看護の特性であり、「在宅における対象尊重の看護」の進め方、「対象との関係性を重視した看護」であり、「在宅看護ケアの多様性と高度な技術性」であった。川村佐和子¹⁹⁾は、病棟看護と在宅看護の違いとして、病棟ではたとえインフォームドコンセントを徹底したとしても、多かれ少なかれ医療提供の場での集団的な対応という制約を受けざるをえない。しかし、在宅では療養者とその家族が生活内容を決定するところであり、療養者及び家族主体の生

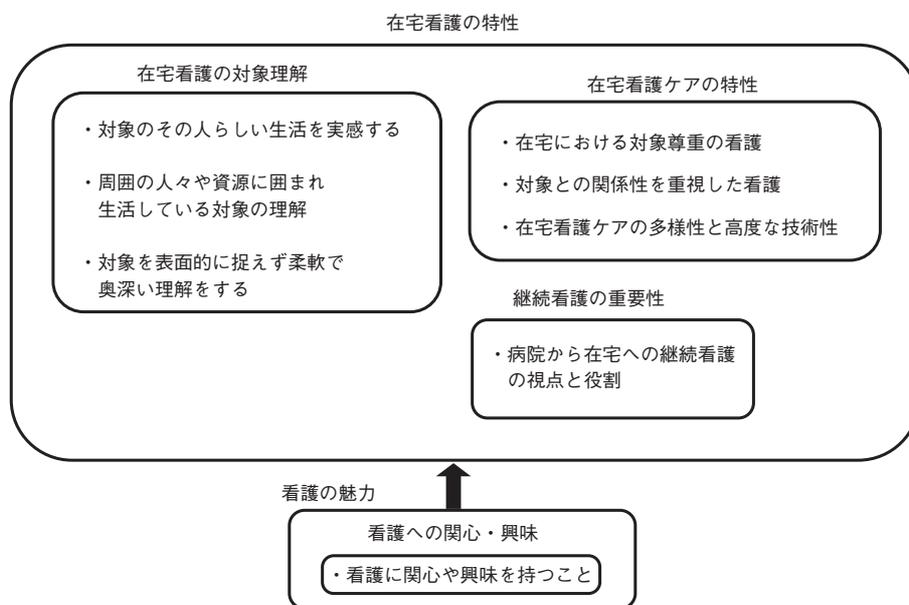


図4 指導者が在宅看護実習で学生に学んで欲しいと思っていること

活である。医師や看護師が家庭という非医療の場で医療や看護を展開しなければならないという制約をもった看護であるという特性があると述べている。訪問看護ステーションの指導者は、そのような非医療の場で、対象者が希望する生活を損なわないようにするという制約の中で展開される在宅看護ケアの特性を学生に学んで欲しいと考えていた。

「統括看護の重要性」は前項の「指導者の在宅看護実習の受けとめ」にもある通り、在宅看護実習は、病院から在宅への継続看護の視点と役割を学ぶ機会であり、指導者はその重要性を学んでほしいと期待していた。

2) 在宅看護の魅力

指導者は、在宅看護実習をどのように捉えているかの中で、「在宅看護実習はヘンダーソンやナイチンゲール等の看護理論を実際に適応する上で最もふさわしいところ」と述べているように、在宅看護に関心や興味を持つことは、看護全般への関心・興味につながるという信念を抱いていると考えられた。

3) 2つのカテゴリーの関連 (図4)

表4の2つのカテゴリー間の関連性を検討した結果、図4のように構造化することが出来た。即ち、指導者が在宅の場で学生に学んで欲しいと思っていることは、在宅看護の特性であり、それらを支える内的動機として看護に魅力を感じることであった。

以上のことから、訪問看護ステーション指導者の看護基礎教育過程の学生に実習の場で学ばせたい内容は、教育機関の在宅看護実習で学ばせたい内容と一致

するものであった。今後、訪問看護ステーションの指導者と在宅看護実習を協働で進めるためには、指導者の実習の負担を最小限にすることである。そのために、実習内容について更に綿密に協議をし、指導者と合意できるように努めることや、指導者が使用しやすい評価基準の開発などの改善を図る必要がある。また、訪問看護ステーションの職員の実習を引き受けるメリットを大きくするために、学生のレディネスを高めるとともに、在宅看護論や在宅看護教育の方法論を発展させる努力をする必要もあると考えられる。

研究の限界と今後の課題

本研究は、看護学生の在宅看護実習受け入れに対する訪問看護ステーション指導者の意識をグループ・インタビュー法によって明らかにした。対象施設は6ヶ所で、本学の看護学概論や在宅看護実習の依頼施設15ヶ所の4割であり、全体の意見ではなかった。また、今回の司会者はグループ・インタビューの経験がなかったため、インタビュアーの発言を十分に引き出せたとはいえないという限界もあった。従って、今後は今回の研究で明らかになった内容を手がかりにしながら、訪問看護ステーションの指導者と十分な意見交換をし、双方の発展に資する方向で、実習体制や実習内容を協働して検討して行く必要がある。

謝 辞

最後に、本研究にご協力いただいた訪問看護ステーションの所長、並びに実習指導者の方々に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 野地有子：地域看護における在宅ケアと地域看護管理－個のケアとコミュニティーケアの統合－. 聖路加看護大学紀要23：22-28, 1997
- 2) 日本看護協会／日本訪問看護振興財団企画・編集：全国における訪問看護・家庭訪問サービス定点モニター調査. 東京, 日本看護協会／日本訪問看護振興財団, 2001, p190-193
- 3) 社団法人日本看護協会中央ナースセンター：「平成11年訪問看護ステーションにおける看護婦等の人材確保に関する調査」報告書. 東京, 日本看護協会, 2000, p15-16
- 4) 秋元園子, 細田泰子, 原田光子他：看護基礎教育における訪問看護教育の課題. 東海大学短期大学紀要. 30：75-80, 1996
- 5) 水谷聖子, 綾瀬泰代：在宅看護実習のあり方に関する調査研究 (1). 日本赤十字愛知短期大学紀要10：67-80, 1999
- 6) Immy Holloway, Stephanie Wheeler (野口美和子監訳)：ナースのための質的研究. 東京, 医学書院, 2000, p151
- 7) 湯浅孝男, 前田明, 本橋豊：フォーカスグループインタビューの手法を用いた地域の24時間在宅介護サービスの現状の評価. 日本公衛誌46：1020-1027, 1999
- 8) Sharon Vaughn, Jeanne Shay Schumm, Jane M. Shinagub (井下理監修) グループ・インタビューの技法. 東京, 慶応義塾大学出版会, 1999, p47-146
- 9) 舟島なをみ：質的研究への挑戦. 東京, 医学書院, 1999, p142
- 10) 小川典子：フロレンス・ナイチンゲールにおける在宅看護の概念. 看護研究30：p63-75, 1997
- 11) 松野かほる, 川島みどり, 宮崎和加子：在宅看護活動. 系統看護学講座－専門4, 東京, 医学書院, 1997
- 12) 木下由美子編著：在宅看護論第3版. 東京, 医歯薬出版株式会社, 2000, p9
- 13) 川島みどり編集：在宅看護論. 東京, 医学書院, 2000, p55-63
- 14) 中川紀代美：学生指導の充実と職員の資質向上を両立させるために. 訪問看護と介護, 2：178-182, 1997
- 15) 上野桂子：在宅の現場の理解と学生を思いやる姿勢を期待. 看護展望23：446-448, 1998
- 16) 川越博美代表編集：訪問看護ステーション臨地実習マニュアル, 東京, 医学書院, p47, 1999
- 17) 厚生統計協会：国民衛生の動向. 厚生統計協会, 東京, 2001, p176
- 18) 大谷英子, 松木光子：老人イメージと形成要因に関する調査研究. 日本看護研究学会雑誌18：25-38, 1995
- 19) 川村佐和子：在宅看護技術の体系化に関する研究. 看護研究30：3-7, 1997

Home care nursing instructor's awareness regarding nursing
students' practice in home care
—Focus group interview method—

Kinko KATO, Noriko HIRANO, Hisako IZUMI, Yasuko KUDO, Ariko NOJI

Department of Nursing, School of Health Sciences,
Sapporo Medical University

Abstract

The purpose of this study was to identify home-care nursing (HCN) instructor's awareness regarding how they understood HCN students' practice, and what they want students to learn in home care. Participants of this focus group interview are HCN instructors who educate students of our university. The meaning that HCN instructors undertake HCN students' practice are the students' opportunity to learn HCN and continuum of nursing care. Moreover it is the opportunity to enlighten selves for home-visit nursing staff and to popularize the importance of HCN in a lot of nurses. Also, the nurses as the educator of HCN notice the responsibility that they want those students to have the better learning, but on the other hand they feel the load that enough coach system is not provided. The HCN instructors hope the students to understand that the life of the patients is suitable for the person and the ideal ways of nursing care which respected the patient and their family, and the importance of continuum of nursing care. And then, they hoped the students to have an interest and an appeal in nursing widely.

Key words: Home care nursing practice, Continuum of nursing care, Focus group interview